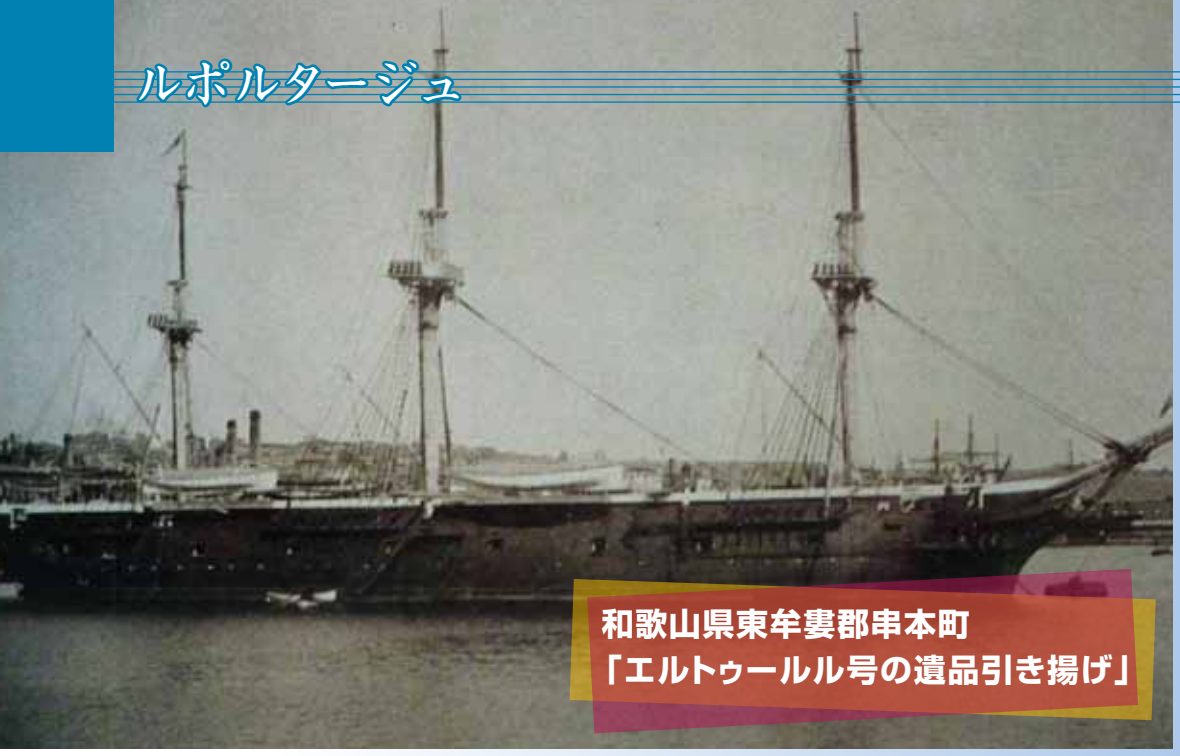
トルコと日本をつなぐ――海の物語と銅の鍋



木造フリゲート軍艦エルトゥールル号（1863年頃、イスタンブールにて）

トルコの人たちは、昔から日本びいきと言われている。そのひとつの理由を和歌山県串本町で見つけた。それは、一二〇年以上も前、紀伊大島・樫野崎で沈んだオスマン帝国（現・トルコ）の軍艦エルトゥールル号と、その救助にあたった村人の献身的な物語である。その友情の絆は、いまも脈々と受け継がれている。十年前には、トルコ考古学チームの要請に応え、樫野崎周辺の海底調査が地元住人の協力のもとで開始された。そこで引き揚げられたのが、ひと抱え以上もある銅製の鍋だ。今年二月二十二日に開催された慰霊祭に合わせ、発掘チームのリーダーであるトゥファン・トゥランル氏が来日すると聞き、我々は和歌山県串本町へ向かった。

悲劇の軍艦・エルトゥールル号と串本町

トルコでは、教科書に載るほど有名なエルトゥールル号のエピソードだが、わが国では関西圏以外であまり知られていない。

一八八九年七月、オスマン帝国（現・トルコ）からオスマン・パシャ提督と六五〇名の乗組員が、スルタン（皇帝）からの勲章と贈り物を明治天皇に献上するため、軍艦エルトゥールル号に乗り、一万五千キロも離れた遥か東方の国・日本へ向けて出港した。厳しい航海を経て、横浜に到着したのは十一ヵ月後の一八九〇年六月であった。無事に大任を果たし意気揚々と帰途についたエルトゥールル号だが、出航して間もなく紀伊大島・樫野崎沖で嵐に遭遇。船は岩礁に激突し、真二つに破壊され沈没してしまう。この時、住人の懸命な救助活動により六十九名が助け出される。さらに、日本各地から義捐金が集められ、生存者たちは母国へと無事に帰国することができた。以来、両国間は深い友情の絆で結ばれている。最近でもイラン・イラク戦争の邦人救出をトルコ政府が支援、トルコ大震災では日本が義捐金を送るなど、互いに友好の絆を保ち続けている。

追悼式では、慰霊碑を囲んで588本のキャンドルに火が灯された

和歌山県串本町では五年に一度、エルトゥールル号の犠牲者を弔う追悼式典が開かれている。今年二月二十二日に開催された追悼式典は、トルコ・日本国交樹立九十周年記念事業として、トルコ大使も臨席し、いつにも増して華やかに、厳かに執り行われた。慰霊碑の周辺には、エルトゥールル号の犠牲者五八七名分のキャンドルと、イラン・イラク戦争で邦人救出に尽力されたトルコ航空の機長・故オルハン・スヨルジュ氏の一本を加えた計五八八本のキャンドルに火が灯され〝友情のともしび〟として祈りが捧げられた。

樫野崎の灯台、近くに慰霊碑が建てられている

エルトゥールル号が座礁した樫野崎の岩礁

乗組員の食事を一手にまかなっていたとされる巨大な銅製料理鍋

エルトゥールル号から引き揚げられた銅製の大きなイヌ釘

海軍士官のものと見られるボタン

海底からの引き揚げ作業は　海水の透明度の高い1～2月に行う

座礁で激しく破損した銅製の船体蓋い

様々な異物が付着した凝固物を根気よく丁寧に処理していく

トルコの海底考古学チームに協力し海底に眠る遺品を引き揚げる

羽田空港から約一時間のフライトを経て南紀白浜空港へ。そこから串本町には車で向かう。本州最南端、気候の穏やかな土地とはいえ、まだ春の気配は遠い。約二時間かけて串本町に到着。大島へ架けられた橋を渡り、事故のあった樫野崎に向かう。ここには慰霊碑やトルコ記念館が建てられている。現在の引き揚げ作業の状況などを串本町役場でトルコとの国際交流を担当している総務課の西野真主任、産業課の折田みゆき主事に伺ってみた。

「事故直後の引き揚げで約三六〇点、その後も三十点以上の遺品が引き揚げられました。しかし、船が沈没した海域は外海で海流の流れが激しく、透明度の高い一～二月しか作業ができないため、海底にはまだ多くの遺品が残されたままでした。そんな中、トルコの海底考古学研究の第一人者であるトゥファン・トゥランル氏より、エルトゥールル号の歴史的な認識を新たにし、いまだ海底に眠っている遺品を祖国の人たちに見せたいと依頼があり、協力することになったのです」。

平成十八年にスタートした発掘調査は、まず事件の背景を調べることから着手。翌年にソナーや金属探知機による海底調査を行い、ダイバーが海に潜って本格的に遺品を引き揚げる作業は、平成二十年から開始された。

「トゥファン氏自らも海に入り、日本人ダイバーたちの協力のもとで、これまでに七五五八点もの遺品が引き揚げられています。木製の遺品は保存処理が難しいため、一部はトルコの水中考古学研究所に運ばれましたが、大半は串本町で復元・保存作業を行い、展示しています。トルコでは、平成二十二年が沈没事故から一二〇年目ということもあり、〝日本年〟として、串本町の姉妹都市・メルシン市で大きな展示会が開かれました。また、一二五年目の平成二十七年には大規模なエルトゥールル号展が準備されています。串本町では五年に一度、追悼式典を行い、展示会も合わせて開催しています。今年は、トルコ・日本国交樹立九十周年記念でもあり、多くの方に両国の絆を再確認いただけるように、さまざまな催しも企画しました」。

串本町役場　産業課
主事　折田 みゆき氏

串本町役場　総務課
主任　西野 真氏

追悼式典の幻想的なキャンドルの灯りを見つめていると、言葉の壁も、国境もすべてどこかに消えてしまう。多くの参加者たちは、人が人を助けたいと思う、その素朴なやさしさを感じ、両国の絆がより深まることを静かに祈っていた。

「エルトゥールル号の事件は、トルコと日本の友好の礎となったエピソードのひとつです。今後、串本町としては、展示方法やPRにより力を入れ、多くの日本人に知ってもらい、トルコとの親交を深める役目をしっかり果たしていきたいと考えています」。

閉校した小学校が発掘チームの拠点になっている

銅製品だから、海底にあってもいまも形に残り手で触れることができる

自国のトルコだけではなく、日本や米国でも研究協力者を募り、資金の調達にも奔走して、エルトゥールル号の発掘調査を実現したトゥファン氏。その情熱はどこからきているのだろう。

「私は、長年ローマやギリシャ時代の沈没船の潜水発掘調査活動に携わってきました。エルトゥールル号には強い関心を抱いていましたが、一万キロ以上も離れた日本では簡単に調査も行えません。多くの方のご理解のもと、こうして発掘作業を実現できたことに感謝しています。私の目標は、ただ遺品を引き揚げるだけではありません。トルコ国民に、エルトゥールル号の持つ意味を伝えることこそが本当の目的です。沈没してしまいましたが、彼らは日本との友好親善に命をかけたのです」。トゥファン氏は、発掘にあたり、トルコと日本の親善に命がけで臨んだ乗組員たちの想い、また生存者たちの帰国後の姿などをつぶさに調査した。

「そんな彼らの想いを、目に見える形でトルコ国民に伝えたいと考えました。また、発掘にはトルコ人だけではなく、日本の学生や一般の方にも参加してもらい、実際に手で触れて、彼らのメッセージを感じ取ってほしいと思っています。幸い遺品の多くが銅もしくは銅合金で造られています。これが鉄製でしたら、錆びてしまい四～五年で消えてなくなっていたことでしょう」。

引き揚げた銅管に付着した固形物を除去
120年の時を経てその姿が蘇る

引き上げた遺品のひとつひとつから乗組員たちの想いを感じ取ってほしい

「これまで引き揚げてきた遺品のひとつひとつからは、乗組員たちのぬくもりを感じ取ることができます。展示の目玉としている乗組員たちの食事を一手にまかなっていた巨大な銅製の料理鍋、また引き揚げた凝固物を丁寧に処理していくことで、彼らが身につけていたボタンや所持品、またコーヒーミルなども発見できました。いまでも次々と遺品が揚がっていますので、今後なにが出てくるか、さらにエキサイティングな発見があるのではと期待しています」。

遺品が損失しないように、引き揚げ作業では細心の注意を払い、脱塩処理も時間をかけて丁寧に進められている。トゥファン氏は、最終的に引き揚げた遺品を集めた海中公園をつくりたいと考えている。

「水深が比較的浅い所を公園として解放できれば、アジアでも前例のない公園の形として注目を集め、より多くの方に関心を持っていただくことができます。そして、実際に手で触れ、乗組員たちの友好の想いを受け取ってほしいと願っています」。

トルコの海底考古学研究の第一人者
トゥファン・トゥランル氏